

《第6回国際シンポジウム報告2》

知日家英国人特派員(フランク・ホーレー) の伝えた日本

横山 學*

1. フランク・ホーレー

フランク・ホーレー (Frank Hawley) は、1906年に英国イングランド北部のノートンに生まれ、リバプール大学でフランス語・文献学を修めて卒業した。その後、パリ大学・ベルリン大学・ケンブリッジ大学で学び、ロンドン大学で満州語を教えていた時期に、日本から学会で出かけて来ていた英語学者の千葉勉教授と出会い、昭和6年晩夏に東京外国語学校の雇外国人教師として来日した。最初の3年間は、東京外国語学校と東京文理科大学の英語教師を兼任、のち1年間、京都の第三高等学校の英語教師を勤めた。その後、関東に戻り、「外国人のための日本語辞書」の執筆や『簡易英英辞典』(研究社刊)執筆・編纂に関わる。来日して3年目には雑誌『文芸』『改造』に日本文化に関する論文を日本語で発表し、新進気鋭の日本研究家として注目された。開戦直前に英国大使館の英国文化研究所所長を務め、開戦と同時に警察に逮捕され、巢鴨拘置所に拘留された。7ヶ月後、英国大使館の人たちと共に強制送還された。

戦時中は、英国放送(BBC)の日本語放送に関わり、外務省に移ってからは主にワシントン(G2)において日本情報収集の仕事を行なった。終戦後、昭和21年2月にはザ・タイムズ社の特派員となり、昭和21年7月に再来日した。昭和27年2月まで、ザ・タイムズ紙東京支局長

として、占領政策が実施されて復興する日本の状況を、ロンドンを経由して世界に報道した。マッカーサーが退任し占領政策が終了した時期、昭和27年、ホーレーもタイムズ紙を退職し、京都の山科へ移った。戦前から続けてきた日本研究に没頭し、著書を2冊遺して、昭和36年1月10日に病気で他界した。

ホーレーは戦前から日本関係文献の集書に熱心で、希書や貴重書を含む「宝玲文庫」本の蔵書家としても著名であった。蔵書1万6,000冊は、敵産管理法により、日本政府に没収された。ホーレーは急ごしらえの蔵書目録のみを手に戻国した。この蔵書を取り戻すため、一日も早く日本に戻りたいと強く望んだ。戦後は経済的に恵まれ、さらに物価の混乱期であったことから、多くの貴重書が集まった。「宝玲文庫」の名称は、古書界において一層注目された。⁽¹⁾

没後43年を過ぎた現在、遺著となった『日本の捕鯨と鯨』(英文)に米国の鯨類学者たちが注目し始めた。捕鯨を文化として取り扱い、その文化の広がりや深さを、史料を示しつつ綿密に論述したこの著書は、現在新たな評価を得ようとしている。

2. ホーレーの業績

1. 日本語研究

「日本に来るまで日本語は学んでいない」「知っているのは釣鐘泥棒という言葉だけだ」と、来日して3年後に結婚した美野田俊子に、

*ノートルダム清心女子大学教授

ホーレーは語っていた。これには少し説明が必要だ。ロンドン大学講師の吉武三郎と親交のあったホーレーに、日本語の知識が全くなかったとは考えられない。身長6.3フィートの体格を「釣鐘泥棒」と評したのは、吉武であったかもしれない。ホーレーの日本語の習得は早かった。来日して3年目には、論文「欧羅巴人の研究したる日本文学」（雑誌『文芸』昭和8年12月号）、「日本語の起源について」（『改造』昭和9年2月号）、「竹取り物語を讀みて」（雑誌『文芸』昭和9年3月号）を日本語で書き、雑誌の編集者も驚嘆している。昭和12年に国際文化振興会がG・サンソム、ハロルド・ヘンダソンとともにホーレーを招いて、彼の日本語習得の秘訣を尋ねた。⁽²⁾ホーレーの初期の論文は、日本関係文献の考証と、日本語古典の原典研究、そして日本語と周辺言語との比較研究であった。ホーレーは、チェンバレンの著作と言語学を手がかりに、日本文化と民族性を分析し、和紙に記された日本文学の古典を研究対象としながら、やがて日本文化の豊かさに魅了されてゆく。

昭和9年に京都に移った頃から、「外国人のための日本語辞書」を手がけはじめた。この辞書が、「国際文化振興会」が企画する「皇紀二千六百年祭」の行事企画として採用されたが、完成には至っていない。当時、匿名の日本人英文学者から厳しい批判文が送られた。「これを出版するなら出版社にとって経済的な、编者にとっては名声の大きな損失である」と書きはじめ、「貴殿は辞書を作ろうとしているのか、それとも百科事典を作ろうとしているのか」と批判し、「時代遅れの原稿」と決め付けた。ホーレーは、これに対して激しい反駁文を残している。その後、研究社の『簡易英英辞典』の編纂に中心的に関った。ホーレーは、「外国人のための日本語辞書」を含めた「日本語辞書」を編纂するに当たって、次のように考えていた。「日本語語彙の真の意味を追求し、ある種の学者た



特派員時代のホーレー

ちが斯くあるべきと考えている形式よりも、実際に用いられているとおりの日本語を記述しようと努めた。したがって、基本的に辞書は説明的であるべきで、語源的論考に多くの紙面を割くべきではない。」当時の日本人英文学者が期待した「実用的な辞書」と、相容れる物ではなかった。⁽³⁾

2. 特派員

昭和21年2月、日本に帰る手立てを探っていたホーレーは、ザ・タイムズ紙の東京特派員として採用された。ホーレーの戦前10年間の在日経歴と優れた日本語能力が期待されたもので、BBC（英国放送）の任務や外務省時代に得たアメリカからの評価によってかなった就職であった。特派員としての基礎訓練を終えた後、空路をとって7月に日本へ到着した。9月には最初の記事をロンドンへ打電した。その後、昭和27年2月まで、ザ・タイムズ紙の東京支局長として特派員生活を送った。荒廃した日本の戦後復興、新憲法の成立、占領政策の詳細、朝鮮半島・台湾・中国を含む極東情勢を、記事（3,000件）として打電した。また、新聞記者嫌いでも知られていたマッカーサー元帥と定期的に単独会見をした。ガスコイン英国大使、芦田

均大臣らとも単独会見し、占領政策や日本事情について、報告書（バックグラウンド・レポート）としてロンドンの本社へ送っている。⁽⁴⁾

打電し掲載された記事が大問題となったこともあった。昭和25年6月6日に打電した「マッカーサー指令による共産党24名の追放」記事は翌日掲載された。この記事をGHQが取り上げ、ホーレーを「好ましからざる人物」として対処するよう駐日英国大使ガスコインに求めた。これが、英国議会で取り上げられ、各国の報道陣も巻き込んだ「ホーレー事件」である。⁽⁵⁾

3. 日本文化研究

来日当初から、「日本語に精通した新進気鋭の外国人」として新聞や雑誌に紹介された。「在留外人の「日本研究家」は語る」『読売新聞』（昭和9年1月31日）、「イギリス人の語学者 大和撫子と結婚」『大阪朝日』（昭和9年4月12日）、「京の第一印象」『東京日々新聞』（昭和9年8月16日）、「日本研究に結ぶ」『朝日新聞』（昭和9年12月6日）など数多い。ホーレーは日本の古典籍の美しさに魅せられていた。多忙な特派員の職を離れて取り組んだ仕事は、研究の成果を「良質なテキストに詳細厳密な注釈を加えて」「最高の技術で漉いた和紙」を用いて出版することであった。手がけようとした仕事は数多い。「倭名類聚抄の原文翻刻と解題」「琉球書誌」「紙漉重宝記の原文翻訳と解題」「鳥名便覧の原文翻訳と解題」「鯨志の原文翻刻と解題」「紙譜の原文翻刻と解題」は着手され、原稿も用意されたが、出版には至っていない。『英国軍医の日記』と『日本における捕鯨と鯨』は、白石の特漉和紙に吟味したインクを用いて京都の河北印刷から出版され、後者は遺著となった。⁽⁶⁾

3. フランク・ホーレーの見た、そして伝えた「日本」

1. 『読売新聞』連載記事

英国タイムズ紙の特派員という立場は権威と捉えられ、他の報道機関から執筆やラジオ出演の依頼が寄せられた。フランク・ホーレーは昭和26年7月から翌年の6月2日までの1年間、『読売新聞』紙上に「外人記者の直言（Objectively Speaking）」（全10回）を連載した。1,600字程度の4段囲み記事で、最初の掲載記事には自筆サイン、次回からは本人の顔写真などが添えられている。

第一回「理性を忘れた？ 戦後派の日本女性たち」[昭和26年7月20日掲載]

「一番強い人の道徳的素質でさえも生活状態が耐えられないほどひどくなればくじける傾きを示す」と述べ、戦前の生活と比較している。多くの「成人男子はその不幸な経験を立派にきりぬけてきた」が、「駐在する連合軍に関係する」婦人たちに道徳感の低下が目立つと嘆いている。

第二回「世界一の優秀さ やめよ、欧州製本の真似」[昭和26年8月7日掲載]

和紙に詳しいホーレーは、「エロチックなカストリ」雑誌の氾濫と著しく粗悪になった「製本」（本作り）を嘆いている。「日本は世界で最上の手漉き紙を他の国が足元にも及ばぬいろいろな形で作っている」「欧州の製本を安っぽく真似たまやかしの製本が続いている、という。「鳥の子の最上紙」がヴェルサイユ条約の料紙として選ばれたのは、その丈夫さにおいてである。日本は紙や材料の質を落としたりせず、「世界で一番完全な紙の作り手としてその名声を維持せねばならない」と結んでいる。

第三回「桑港だけでは残念 海渡る古美術、世界を歩け」[昭和26年8月21日掲載]

7月26日付けの「日本古美術展」記事に寄せたものである。講和会議を機にサンフランシスコのデ・ヤング博物館が、日本の文化財を国民に紹介するため、アメリカ各地点に存在する日本美術品と合わせてこの展示会を開催したいと申し出た。それを文部省文化財保護委員会が受けた。日本からは国宝の「渡辺峯山作鷹見泉石像」や「一遍上人絵伝」を始め40点、他に彫刻、工芸、書跡、古織物「正倉院裂」など120点を候補としたとある。ホーレーはこのことを高く評価し、「それらの一部が当地に留まるならばいっそう良いだろう」と記している。イタリアや英国の文化財の実情も紹介しながら、日本が自国の美術品を国宝として分類することを「不健全」な「行過ぎの国家主義、島国根性」と批判し、続けて次のような体験談を記している。ホーレーは、日本で最も古い文庫とされながら、蔵書の大部分が長年にわたって散逸している金沢文庫の旧蔵本（3点）を入手した。これを持参して、金沢文庫を訪れた。ところが、対面した館長は、それらが「第三人」の手に移り、「極めて残念なことに、永久に国内から散逸してしまった」と書かれた。

この時の館長関靖は、その年の4月30日に大日本雄弁会講談社から、『金沢文庫の研究』を刊行したばかりであった。著書には、所蔵者の名を記さないまま「倫敦・宝玲文庫蔵」3点（「管弦音義」「音楽根源鈔」「八幡宮年中讃記」）についての記述がある。前者2点をさして、これらのものを「昭和24年10月東京の某氏が入手して私に見せた」「両書には何れも金沢文庫の印記は捺されていないが、称名寺第二代長老明忍房劔阿の署名があり、その本文は非常に長いものであるが、全部同僧の手跡である所から、これがその原本であることはいふまでもない」と貴重性を述べている。そして、「この書（「音楽

根源鈔」）も前書同様に、全く所在不明であったが、是亦、某氏の手に入ったものである」「全巻明忍房劔阿の手跡である」「極めて残念なことに、両書とも第三人の手に渡ってしまひ、永久に国内から散逸してしまった」と記している。さらに「八幡宮年中讃記」については、金沢文庫の蔵書印（重郭肉細の朱印）はあるが、それは「後人の妄作」の「偽朱印」を捺されたものであるとしている。『金沢文庫の研究』は文庫の歴史と蔵書の顛末を丹念に追跡し克明に記述した、同文庫の研究には欠かすことのできない優れた研究書だ。この著者とホーレーとが出会い、不幸な対立が生じてしまった。日本が「敗戦」し、戦勝国の「外国人」が日本の貴重な書物を入手したことに、感情的な反発があったのであろう。「自分には、日本人への偏見は無い」と語っていたホーレーにとって、自分が無名の「第三人」とされ、宝物を持ち去ったものとして記されたことはいかにも残念で、これを日本人の「島国根性と偏見」と見たのである。この思いは、ホーレーにとって初めてのものではなかった。日本文化の優秀さを認め、その文化の維持を強く願っていたホーレーは、「外国人」であることを理由に自分の業績や価値を素直に認めようとしないう日本人の偏見に、強い不満を抱いていたのである。

第四回「うまい日本の食物 料理法もフランス以上」[昭和26年9月14日掲載]

ホーレーは、日本の食事を「単に風味がすぐれているばかりでなく、その一つ一つが持っている美的感覚がまたひどく賞賛される」と褒めている。日本人が外国人に刺身を「生魚（ロー・フィッシュ）」と訳しているのは誤りで、自分の国の文化に誇りを持って、「サシミ（刺身）」とすべきであると提案している。また、地方では「東京料理」の「真似料理」ではなく、その土地の新鮮な田舎の野菜や川魚を食したい、と

いう。ホーレーは美食家で、戦前にも「すっぽん料理」(『改造』昭和10年3月号)を著している。

第五回「崩れゆく自由 婦人少年局の廃止案をめぐる 英は嘆く“旧日本の復活”」[昭和26年10月5日掲載]

昭和22年9月に設立された労働省婦人少年局(現在の女性局の前身)が廃止されそうになったことを取り上げて、日本が歩み始めた民主化の道を、日本人自らが戦前の状態へ逆行させることを危惧している。マッカーサー元帥が更迭され、講和条約が批准され、主権を取り戻した日本がなそうとしている戦後改革の修正が心配でならないというのである。

婦人少年局は設立当初から何度も廃止されそうになり、定員が減ぜられた。この時期には、児童局と合併し「婦人児童庁」として総理府へ移すことが提案されたが、見送られた。9月17日に、「婦人少年局を残せ」と神近市子らが街頭演説を行ない、局の存続を訴えた。2日後の19日に、市川房枝・神近市子・鬼頭みつ子の3人が、渋谷区猿楽町のホーレー邸を訪問しているのは、この運動に理解を求めためであったろう。⁷⁾

第六回「東京温泉“二つの怪” 建築許可と資金引き出し」[昭和26年11月12日掲載]

昭和26年4月1日、銀座六丁目の松坂屋デパートの裏に豪華な娯楽場「東京温泉」が開館した。この施設の閉鎖を日本政府が促したことを、高く評価している。「東京温泉」は許斐氏利が所有経営した浴場施設で、マッサージ・サービスを備え「トルコ風呂」と名づけた。古い神社仏閣が放置され、「原料」(資材)が不足し、都市の復興に余力のない時期に、巨額の建築費用を要する娯楽施設に簡単に建築許可が与えられ、容易に資金融資がなされたことに、ホー

レーは疑問を投げかけている。

第七回「日本研究の復興 西園寺記念会に期待」[昭和26年11月23日掲載]

「ここ二三週来の出来事で一番喜ばしい事の一つ」は西園寺記念会の設立であるとしている。その趣旨は西園寺公望の記念であるが、同時に「日本歴史の研究にあたる日本および英連邦の人々」を招き、旧別邸「坐魚荘」に滞在させる、ということだ。ホーレーは「日本人と英連邦の人々が平等な立場で一緒に仕事」をすることを歓迎している。戦前に「皇紀二千六百年事業」への参画や、日本言語習得法についての聴聞会に引き出された自らの経験の中で、国際文化振興会が外国人の日本研究者に向けた姿勢は、「常に高ぶった優越感をもって望」み、「法王のような威厳を持って語り」、日本研究者は「その足下にひざまずかされ」たと、その時の苦い経験を語っている。

第八回「新王女精神で克服」[昭和27年3月24日掲載]

前年の暮れから4ヶ月間、英国へ帰国したときの感想を述べ、あからさまではないが、労働党政権が進める社会保障制度の実施が、社会的な停滞を生じさせているという。タイムズ社やBBC放送局を訪れ、人々が「喜んで働こうとしない」様子を見て、「働く意欲をなくしてしまう重税」が問題である、としている。しかし、「エリザベス新女王」のもとに示されるであろう「新しい精神」に期待する、と結んでいる。

第九回「“独立”謳歌するな 自由への道は人権維持」[昭和27年5月9日掲載]

「対日平和条約」(サンフランシスコ講和条約)の調印と「メーデー事件」について述べている。講和条約の調印によって日本に主権が戻ったが、日本が得たものは「独立」ではなく

「旧敵国の多数との平和」であることを意識して外交に当たるべきであり、英国は日本に「自由世界の一員としての自国の責任」を自覚することを望んでいる、という。続けて、「メーデー」当日に生じた「暴力と無法」に十分な処置をとらなかったことは、残念としている。共産主義への対応は「抑圧的法案」ではなく、「健全な組合主義と労働者の利益の擁護」である。日本政府は「組合主義」を削り取ろうとしているが、これは将来に「暗い予感」を感じさせる。大切なのは、「人権の擁護」である、という。

第十回「古い日本の良さ 望みたい仏教の発展」[昭和27年5月24日掲載]

日光の金谷ホテルに滞在中に執筆。フランク・ホーレーは、日本の伝統の良さを維持してゆくのは仏教である、と強調している。

昭和6年から約10年間滞在し、強制送還されたホーレーは、5年後に再び来日した。5年間と言う時間の流れと、敗戦を境に大きく変わった「日本人」について、期待を込めて率直な感想を述べている。「日本文化」に対しても、「敗戦」という現実にくじけず自信と誇りを持って、伝統を維持してゆくことを訴えた。それは、日本文化に対する深い理解に基く発言であった。

この連載記事の掲載された昭和26年は日米講和条約が調印され、日本の戦後復興にひとつの区切りがついた時期である。マッカーサー司令官が罷免され、リッジウェイ中将に代わる。占領下の国内外の報道機関に対してとられた占領政策批判の規制も解消し、自由な報道が許されるようになった。朝鮮戦争は一時休戦となるが、朝鮮半島・中国大陸の共産勢力との対立が現実化し、戦争放棄を憲法に明記した日本を日米安全保障条約によってアメリカ陣営に組み込む必要が生じた。日本においても、戦後改革を修正しようとする動きが始まり、ホーレーはそれを

「戦前への逆行」として、警告したのである。

2. 報告書（バックグラウンド・レポート）

ホーレーはタイム社に打電する記事を、「News & Telegram」「Turnover」「Mailer」「Background Reports」の4種に分類した。前者3種は紙上に掲載されたが、「Background Reports」は、要人（マッカーサー最高司令官・ガスコイン駐日英国大使・芦田均外務大臣・吉田健一・中西功）との会見や占領政策に関わる日本事情の報告書である。バックグラウンド・レポートの内容は、次の通りである。

昭和21年12月20日「米第八軍における講演原稿」⁽⁸⁾

昭和22年1月12日「連合国対日理事会」

5月10日「対談 吉田健一」

5月18日「5月18日付け共同通信記事について」

5月18日「対談 ガスコイン英国大使
①/5」

7月14日「東京裁判について」

7月19日「南朝鮮情報」

8月7日「対談 H. D. G. クレラー将軍」

11月6日「対談 ガスコイン英国大使
②/5」

11月8日「対談 芦田均外務大臣 ①」

11月28日「対談 マッカーサー最高司令官 ①/7」

12月12日「日本外務省機密文書 領土返還」

12月16日「ニュース・ウィーク紙との情報交換について」

12月3日「日本におけるオーストラリア社会について」

5月13日「対談 マッカーサー最高司令官 ②/7」

昭和23年9月15日「対談 マッカーサー最高

司令官 ③/7]

9月17日「対談 ガスコイン英国大使
③/5]

9月18日「対談 芦田均首相・外務大臣
②/2]

昭和24年2月12日「対談 マッカーサー最高
司令官 ④/7]

4月7日「対談 マッカーサー最高司令
官 ⑤/7]

4月15日「対談 ガスコイン英国大使
④/5]

7月13日「対談 マッカーサー最高司令
官 ⑥/7]

11月20日「対談 ガスコイン英国大使
⑤/5]

12月14日「マッカーサーについて ⑦/
7]

昭和25年1月18日「対談 中西功」

昭和20年9月にソ連が「日本が降伏文書の条項を誠実に履行するように管理査察する機関」の設置を提案し、12月のモスクワ「三国外相会議」で極東委員会と対日理事会の設置が決定された。昭和21年4月から始まり、1週間に1度、水曜日の午前10時、「明治生命ビル」において理事会は開催された。当初はマッカーサー司令官への助言を目的にして設立されたが、9ヶ月を過ぎるころから形骸化し議題も減少した。⁹⁾ここに紹介する「バックグラウンド・レポート(状況報告書)」では、昭和22年1月8日の23回目を終えた理事会の様子、対日理事会の会議に対する姿勢や発言内容、各国代表理事へのホーレーの評価をタイムズ紙本社の上司デーキンに報告している。またホーレーは、占領政策による報道規制下の日本人の心情を洞察している。

この対日理事会についてはマクマホン・ボール(Macmahon Ball)の記した日記(“In-

termittent Diplomat” The Japan & Batavia Diaries of W. Macmahon Ball)¹⁰⁾に詳しい。英国とは別に、英連邦として対日委員会に発言権を持つことは、オーストラリアにとって重要な意味があり、オーストラリア外務大臣ハーバート・V・エバット博士は英連邦代表としてマクマホン・ボールを選んだのである。

「機密

タイムズ特派員、
British Commonwealth サブエリア、東京、
British Commonwealth Occupation Force in Japan
1947年1月12日

R. Deakin O.B.E.殿

Imperial and Foreign News Editor

“The Times”

Printing House Square,

London, E.C.4

デーキン殿

これは対日理事会のバックグラウンド・レポートで、編集上有用だと思われます。ご承知のとおり、会議の報告を既にくつかお送りしてあります。

日本の対日理事会は東京に置かれています。報道にも公開される会議は、2週間に1度開催されます。非公開の会議ももたれるのですが、最近では開催されているようには見えません。会議の目的は、ワシントンの極東委員会の指令に基づき、いかに日本の占領を遂行すべきかを、連合軍最高司令官マッカーサー元帥に助言することです。これが少なくともその機能に関する理論です。実際には会議はその役割を果たせず、大部分は、アメリカとロシアの、対立する二つのイデオロギーを戦わせる場となっているに過ぎません。

アメリカ代表のジョージ・アチソン、Jr. (George Atcheson, Jr.) は45歳ぐらい。SCAP (連合軍最高司令官) の外交部の長でもあり、大使の肩書きを持っています。彼が会議の議長で、有能で見識があるという印象です。以前は中国の語学学生で、そこで領事にまでなり、極東の問題に通じています。神経質で怒りっぽい気性から、占領政策や米軍政府に対するいかなる批判にもすぐ腹を立てます。私が最初に会議に出た頃は、米国の政策を精力的に擁護したものでしたが、最近では、どんな批判も黙って聞いた後に「次の議事に移ります」と述べるという、新しい手法をとっています。

ロシアの代表クズマ・デレビャンコ (Kuzuma Derevyanko) 中將は、先のポーランドのロシア軍司令官です。すべての会議において、いかなる問題についてもモスクワからの指令なしには意見を述べようとしないことは、うんざりするほど明らかです。どんな問題が起ころうとも総司令部の意見を聞くまで時間稼ぎをするのが常であるアチソンと、この点ではそう変わりません。中国の代表は朱世明 (CHU Shin-ming) 將軍ですが、中国国民政府大臣 Yorkson SHEN がしばしば代理を務めます。英連邦のメンバーは、オーストラリア人のW. マクマホン・ボール、経済学の元教授で、46歳位です。在日英連邦諸国政府のメンバーのヘンリー・ヘインワース (Henry Hainworth)、33歳ぐらいで、1936年から1941年の3年間日本語を学んだ先の副領事、をボールは相談相手としています。

中国国民政府代表は会議の最も誠実なメンバーという印象です。彼らの批判は建設的で、述べることは資料で裏付けられています。彼らの意図は、日本への民主的生活の導入、日本経済の復興、日本国民が世界の正当な場所を領有することを許す、という占領の真の目的を進めることにあると思われます。日本の報道機関を注意深く研究する中国の専門家を有しており、

専門的知識に基づいてマッカーサー元帥に助言するという会議のメンバー (理事国) の役割を、正しく理解しているという印象を与えます。彼らは、パートナーであるべきは中国と日本だと信じているので、中国の利害にはとらわれず、日本の経済生活におけるアメリカの支配の増加に不安を感じています。しかし彼らは、その問題に関する見解を表明するために、会議を利用することはありません。

中国国民政府が日本に対してなんら悪意を持っていないこと、早期の平和条約とこの国との大規模な通商関係を望んでいることは、明らかだと思われまます。中国の代表は、情勢に変化があるたびに、政治問題においてマッカーサー元帥を支持しながらも、機会があれば中国については慎重に言葉をはさみます。アメリカにも日本にも友好的な態度をとらない英国代表と異なり、彼らはアメリカ当局を懐柔する必要性を自覚しており、一方で日本との友好関係が将来いかに重要となるかを忘れていません。

ロシアのメンバーの目的は極めて単純に思われます。ロシアは様々な方法で現在の占領の信用を傷つけようとしています。彼はSCAPの政策を非難する機会を逃すことはありませんが、大概が間接的なやり方です。その不誠実さと、SCAPの指令に文字通りの意味で従おうとしてもその精神を実行できていないことについて、SCAPの代理人である吉田内閣に弁明を求めめるのです。(実際のところ、吉田内閣は強要されている限りにおいてのみ、また任期の限りにおいてのみ、SCAPに協力していることはほぼ疑いはありません。しかし、右派であろうと左派であろうと、日本のすべての指導者に同じことが言えます。吉田内閣はアメリカの復興融資を得ることを期待してSCAPと協調し、最左翼の指導者たちはロシア人から得るもののために彼らを支持しますが、どちらの側も外国人に対して強い好意を持っているわけではありません。

この地の占領軍を進んで、あるいは喜んで受け入れているのは、日本の一般の人々だけです。というのも、軍が去れば、彼らを奴隷の地位に引き下ろす何らかの全体主義が彼らの運命となることを、少なくとも知っているからです。) デレビャンコが望んでいるものは、もちろん極めて左翼の政府です。しかし彼は、今や日本国内に行き渡っている共産主義の宣伝がその目的を遂げるまで、喜んで時期の到来を待つという印象を与えています。300人から400人の将校からなるスタッフを有していますが、彼らが何をしているのかをはっきりと知っている者はいません。

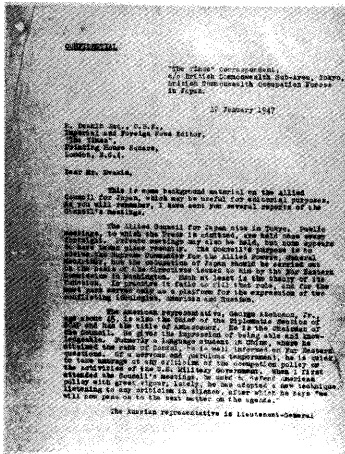
米国軍政府の代弁者であるアチソンについては、英国のより大きな協力を歓迎すると表明していることを付け加える以外、これ以上いう必要はありません。最も問題の多い人物は、疑いなくマクマホン・ボールです。私はよく彼に会うし、個人的には彼が好きですが、彼の態度は理解しがたいものです。あなたもご存知のように、彼はエバット (Evatt) 博士 (外務大臣) から直接指示を受けており、英連邦の利益よりもエバット博士自身の政策を実行することに主として関心があるという印象を、連合国にも日本人にも同じように与えています。アメリカの最右翼の新聞は、常に彼を攻撃する用意ができています。というのも、彼はつまらない人物で、機会があればアチソンを悩ませようとしている、と代表者が感じているからです。一方で最左翼のアメリカの新聞にとっては、デレビャンコ將軍の占領批判を支持しているので、彼は世界の偉大な人物の一人です。彼のアドバイザーであるヘインワースは、経験も知識もない若者にすぎず、英国の立場を遂行することは殆どできません。なぜ日本において英国の威信が低いのか、その理由を分析するようにとあなたは電報を送ってきました。これがその理由のひとつです。ここでは英連邦は正しく代表されていない、と

日本人もアメリカ人も感じています。意見が統一されておらず、少なくとも会議において、占領の目的を進めるために殆ど何もせず、具体的に提供するものもなく、英連邦のメンバーは自らのイデオロギー上の信念を表明することばかりに会議を使っています。ロシア人や中国人およびアメリカ人とは異なり、ボールは、20人ばかりのスタッフの中に真の日本の専門家を有しておらず、実際の資料でも批判でも (ちくりと刺すようなものは別ですが) 会議の他のどのメンバーより寄与するものが少ないのです。

全体として、会議は情けない光景です。さしあたり、いかに有用な目的のためであっても共同して働くことに心底乗り気ではないという印象を、中国人を除くすべてのメンバーから得ています。彼らは単に自らの見解を表明しようとし、歩み寄ろうとする意欲をまったく見せません。日本の新聞と人々は強い興味を持って会議の活動を見守っており、個人的には私が述べたのと殆ど同じ批判をしています。公には彼らはどんな意見も表明することは許されていません。新聞やラジオでの占領批判はアメリカの検閲官によって厳しく禁じられています。

英連邦 (英国)・フランス・オランダ・カナダを招くというマッカーサー元帥の提案から、何も生まれていません。デレビャンコ・朱・ボールが、政府が反対していると述べたため、フィリピンや他の代表たちは、会議で非公式の立場をとっています。

以上が私の率直な報告ですが、あなたとウィリアムズ博士 (Dr. Rushbrook Williams) にとって役立つ情況報告であることを望んでいます。』⁽¹¹⁾



バックグラウンド・レポート
(カーボン複写)

4. 外国人研究者にとっての日本研究

フランク・ホーレーは長年日本に滞在し、経済力の殆どを注ぎ込んで宝玲文庫を構築し、日本に精通していると認知されながらも、中傷や偏見を避けることはできなかった。昭和9年1月に『読売新聞』に連載掲載された「在留外人の日本研究家は語る」記事の中で、ホーレーは日本人英文学者宮森麻太郎の翻訳書に批評を加えた。明らかに、新聞記者に誘導された発言であったが、その結果、宮森から激しい公開挑戦状を突きつけられることになった。また、日本語の能力を発揮して「外国人のための日本語辞書」を編纂しようとした時、酷評する書簡が届いた。研究社『簡易英英辞書』の原稿の大半を仕上げたにも拘わらず、ホーレーは編纂者の名前から意図的に外されそうになった。これに強く抵抗し、法的手段を示唆することでようやく認められた。前述のように関靖氏との軋轢もあった。外国人の日本研究は、日本において常に歓迎されたわけではない。巧みに日本語を操る外国人は、多くの場合、驚嘆と賞賛をもって

受け入れられるが、一定の力量を超えると、その対応は異なったのである。

註書

- (1) 拙著『書物に魅せられた英国人 フランク・ホーレーと日本文化』吉川弘文館、平成15年10月。
- (2) 「日本語海外普及に関する第三回協議会」（国際文化振興会）。ホーレーは、日本語習得の方法を「チェンバレンのものをよく読んで、あとは考えたり日本人と交際したりしました」と答えている。
- (3) 「皇紀二千六百年に三大記念事業」国際文化振興会、『東京新聞』昭和11年10月13日。
「フランク・ホーレーの日本研究と辞書編纂」『生活文化研究所年報』第9輯、平成7年12月。
- (4) 「ロンドン・タイムズ特派員フランク・ホーレー（その一）」『生活文化研究所年報』第15輯、平成14年3月。
「ロンドン・タイムズ特派員フランク・ホーレー（その二）」『生活文化研究所年報』第16輯、平成15年3月。
- (5) 前掲拙論「ロンドン・タイムズ特派員フランク・ホーレー（その二）」。
- (6) 前掲拙著『書物に魅せられた英国人 フランク・ホーレーと日本文化』、『ミゼラニア・ジャポニカ』の出版参照。
- (7) 「宮良當壯とフランク・ホーレー」『宮良當壯全集』月報17、第一書房、昭和63年4月。宮良當壯の日記に、当日、市川房枝ほか2名の訪問があったことが記されている。
- (8) 前掲拙論「ロンドン・タイムズ特派員フランク・ホーレー（その一）」に、「特派員フランク・ホーレーの日本観」として大半を翻訳し掲載した。
- (9) アラン・リックス「日記解題」『日本占領の日々 マクマホン・ボール日記』、岩波書店、平成4年4月。
- (10) “Intermittent Diplomat” The Japan & Batavia Diaries of W. Macmahon Ball, Edited and with an Introduction by Alan Rix, Melbourne University Press.
翻訳は、アラン・リックス「日記解題」『日本占領の日々 マクマホン・ボール日記』、岩波書店、平成4年4月。
- (11) タイプ打ち、三枚、カーボン打ち控え原稿。図版、参照。